様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２７０３

研究課題名（和文）学生エンゲージメントを高める教授・学習環境に関する総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on educational and learning environments to enhance student engagement

研究代表者
山田　剛史（Yamada, Tsuyoshi）

関西大学・教育推進部・教授

研究者番号：４０３７９０２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、（1）文献レビューを踏まえて学生エンゲージメントに関する包括的な定義を導出したこと、（2）心理的安全性に着目し、学生エンゲージメントおよび学習成果を高めるモデルを仮構し、実践的・実証的知見を示したこと、（3）学生エンゲージメントに関する尺度開発を含め、全国学生調査を実施したこと、（4）学習支援専門職員への質的調査により教職員よるエンゲージメントの方法に関する実践的な知見を得たことが成果として挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
米国の高等教育機関における中心概念とも言えるStudent Engagementは、日本の高等教育の中で十分に研究されていない。教育の質保証や教学マネジメントの中核をなす学習成果を高めるためにも、学習過程に着目することは極めて重要であり、そこに深く関わっているのが学生エンゲージメントである。学生エンゲージメントに関する理論的・実践的・実証的研究を通じて、日本の高等教育のあり方への示唆から日常的な教授・学習環境の方策まで、広範な学術的・社会的意義を示せたと言える。

研究成果の概要（英文）：The findings of this study are as follows.
(1) Derived a comprehensive definition of student engagement based on a literature review. (2) A model for enhancing student engagement and learning outcomes was tentatively developed with a focus on psychological safety, and practical and empirical findings were presented. (3) Conducted a national student survey, including the development of a scale for student engagement. (4) Obtained practical knowledge on methods of engagement by faculty and staff through a qualitative survey of academic advisor.

研究分野：高等教育、青年心理

キーワード：学生エンゲージメント　学校から社会へのトランジション　エージェンシー　ウェルビーイング　アイデンティティ　動機づけ　心理的安全性　教授・学習環境

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者は、学習成果基盤型カリキュラムの体系化、学習成果アセスメントを軸とする教学 IR の推進、アクティブラーニングを始めとする FD の組織的展開について研究・開発・普及活動に携わってきた。加えて、学生の成長・発達を促す大学教育の役割や、正課教育・準正課教育・正課外活動の意義・効果についても研究を行ってきた。多くの大学で質保証・質向上のための様々な方法・手段が導入されている一方で、学生は自律的学習者として十全に学び成長できているのだろうか。実際これまでに直接的・間接的に実施・関与してきた調査研究においても、授業時間外学習の伸長はじめ必ずしも学生の主体的な学びの向上を示す結果が得られていない。

他方、米国では一連のカレッジインパクト研究をルーツとして、1990 年代には Student Engagement（以降、SE と表記）に関する研究が登場した。そして、SE に関連する研究成果として、汎用的能力と批判的思考（Pike, Kuh, & Gonyea, 2003）、実践的コンピテンスとスキルの可搬性（Kuh，1993，1995）、認知発達（Baxter Magolda，1992）、心理・社会的発達（Evans, Forney, & Guido-DiBrito，1998）、モラルと倫理の発達（Evans，1987）、学生満足度（Kuh & Vesper, 1997）、社会資本の増加（Harper，2008）など、SE は広範なアウトカムの獲得に肯定的な影響をもたらすことが実証的に示されている。また、2000 年には NSSE（National Survey of Student Engagement）と呼ばれる全米学生エンゲージメント調査が導入され、膨大な調査データの分析から SE を高める教育実践（High Impact Practices）が報告されるなど、高等教育改革・改善における重要な概念として位置づけられている。

このように米国では市民権を得ている SE であり、日本においても米国の取組として紹介されることはあるものの、十分に実証的・実践的研究が実施・蓄積されているとは言えない。そこで本研究課題では、学生の主体的・自律的な学びを促すための Student Engagement（以降、学生エンゲージメントと表記）について、総合的見地から検討することに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、大学生の学習（学び）と発達（成長）に関わる概念である学生エンゲージメントに着目し、理論的整理と関連研究で示された分析結果のメタ分析ならびに実証的検討を行い、大学教育において学生エンゲージメントを高めるための実践的知見を見出すことである。アウトカム基盤型教育やアクティブラーニングの導入が進む中、学生の発達や成長（自立）といった観点から必ずしも望ましい結果が出ているとは言えない。様々な教育政策や改革が学生のアウトカムの向上に寄与するためには、学生自身の学習への関与（エンゲージメント）の視点が不可欠である。また、教職員によるどのような教育・学習環境（人的・物的・制度的）が学生のエンゲージメントを高めるのか。この問いを明らかにすることで、学びと成長の好循環を生み、大学から社会へのトランジション（移行）を円滑なものにすることが可能となる。米国で形成・発展してきた学生エンゲージメント研究の知見をもとに、日本の大学固有の文脈を踏まえて理論的・実証的に検討し、実践に還元することは重要な研究課題である。

３．研究の方法

(1) 文献レビューに基づく理論的検討

主に国外での学生エンゲージメントに関する研究を網羅的にレビューし、その特徴を整理する。エンゲージメントは、様々な理論・概念と関連し合う「メタ構成体」として位置づけられることから、大学教育の質的転換を支え、学習成果を左右する上で特に重要と思われる理論・概念を抽出するとともに、国内外で共通するもの、日本固有の文脈が関係していそうなものを検討する。加えて、国内でも学生エンゲージメントを検討の中心に据えてはいないものの、関連するデータや分析結果も散在しており、これらを収集しメタ分析を行う。

(2) 学生エンゲージメント尺度の開発および全国学生調査の実施

文献レビューに基づく理論的検討を経て学生エンゲージメントを捉えるための尺度を開発する。加えて、学生エンゲージメントを高める要因として想定される変数を同定するとともに、新たに開発する学生エンゲージメント尺度を含めた質問紙を作成する。そして、設置形態（国公私立）や立地（都市部・地方）、専門分野、学年（1～4 年生）のバランスを考慮して、全国の大学生を対象とした調査を実施する。

(3) 学習支援専門職員を対象としたインタビュー調査の実施

学生エンゲージメントには、学生自身による学びへの関与（エンゲージメント）と学生のエンゲージメントを高める教職員による関与（エンゲージメント）の双方が含まれている。そこで、学生の主体的・自律的な学びの実現に向けて伴走支援する学習支援専門職員を対象としたインタビュー調査を実施する。そこから、学生のエンゲージメントを高めるための教職員によるエンゲージメントの方法を抽出し、構造化を試みる。

４．研究成果

（1）学生エンゲージメントの理論的検討

学生エンゲージメントは、大学生の学習や発達に影響を与える大学での経験についての一連の研究や概念を総称した用語（umbrella term）（McCormick, 2013）であり、①学習時間（Tyler, 1932）、②努力の質（Pace, 1980）、③関与（Astin, 1984）、④統合（Tinto, 1986）、⑤一般因果モデル（Pascarella, 1985）といった５つの学問的系譜の上に成り立っている。先行研究へのレビューより、学生エンゲージメントを「大学生の学習と発達を促すために、彼らの置かれている状況や文脈も考慮しつつ、大学が提供する制度や環境、教職員が日常的に行う教育・指導等における深い関与、学生が自らの意志で選択し、学びに対して主体的に関与するというプロセスや一連の経験、そして大学、教職員、学生それぞれが払う関与の質と量の相互連関やダイナミクスを捉える概念」（山田, 2018）と定義した。また、学生エンゲージメントの領域として、認知的（投資、探究など）、行動的（出席、参加など）、情緒的（興味、喜び、所属感など）といった３つで示されることが一般的であるが（Trowler, 2010）、近年では４つ目の領域として、学習者自身が学習過程への能動的な関与を表す Agentic Engagement（Reeve & Tseng, 2011）も示されている。

（2）学生エンゲージメントの実証的検討

文献レビューに基づく理論的検討や、自身が関与した先行研究のデータ収集・分析（大学生を対象に行った大規模横断調査や中高生を対象に行った縦断調査）および複数の学会等での発表を踏まえて、学生エンゲージメントを捉えるための尺度の検討を行った。同時に、学生エンゲージメントを高める要因として想定される変数の同定も行った。特に、当該研究課題遂行中にコロナ禍に遭遇し、この文脈下での教育実践や調査研究を通じて、学生エンゲージメントを高める重要な要素として「心理的安全性（Psychological Safety）」（Edmondson, 1999）に着目する必要性を感じた。そこで、自身の教育実践を対象とし、心理的安全性を組み込んだ学生エンゲージメントや学習成果に及ぼす影響に関するモデルを仮構し、実践的・実証的研究を行った。その結果、心理的安全性が情緒的エンゲージメントを高め、それが行動的エンゲージメントへ、そして学習成果に繋がることが示された（下図）（山田, 2022；2023）。こうした研究を積み重ねつつ、コロナ禍の影響で遅延を余儀なくされた全国学生調査を設計・実施するとともに、順次研究発表等を実施・予定している（山田, 2024 ほか）。

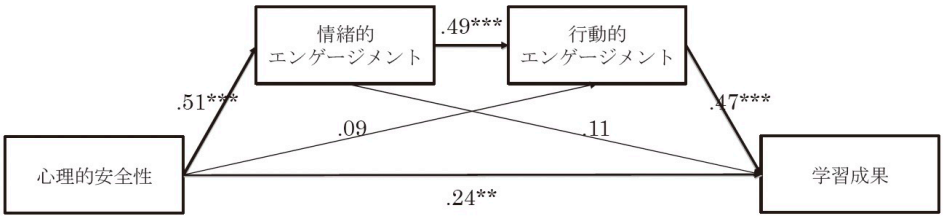

Figure4　共分散構造分析の結果
数値は標準偏回帰係数（*** p<.001, ** p<.01）

（3）学習支援専門職員への質的調査

学生が主体的に学びに関与するためには、心理的安全性の確保や情緒的エンゲージメントの向上などに寄与しうる教職員の関与が不可欠となる。そこで、包括的な学生支援という枠組みの中で学生の成功（Student Success）の実現に携わる学習支援専門職員がどのような関与を行っているのかについて、フォーカスグループインタビューによる質的研究を行った。その結果、5 つの関与のタイプと 15 のカテゴリーが生成された（下表）（山田他, 2024）。学習支援（アカデミック・アドバイジング）という文脈ではあるが、日常的な教育・学習・指導の場面における教職員のエンゲージメントのあり方に有益な示唆をもたらすものである。

表３　Student Success に至るための関与（エンゲージメント）の方法（山田他, 2024 より作成）

A.関与の基本姿勢	B.情報提供・収集	C.態度・言葉かけ	D.学生関与の促進	E.主体性の発揮を促す関与
①学生の成長に向き合う ②足場をかける	③学生情報を収集する ④情報・リソースを提供する ⑤整理・構造化して見せる	⑥フィードバックする ⑦タイミングを見る ⑧励ます ⑨待つ	⑩振り返りを促す ⑪語りを促す ⑫考動を促す	⑬自分事化させる ⑭見通しを持たせる ⑮判断させる

この間、大学や学協会等の講演会・シンポジウム等において、学生エンゲージメントを主題とした講演・発表を多数行ってきた。今後も、実践・研究・開発・研修等多角的なアプローチから学生エンゲージメントを高める教授・学習環境の創出に寄与していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 山田剛史	４．巻 2022年度No.1
２．論文標題 オンライン授業による学修評価をどう考え，実践するかー振り返りとフィードバックを中心とした実践事例の紹介ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大学教育と情報	６．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川嶋太津夫・杉谷祐美子・山田剛史・谷田川ルミ・木村治生・樋口健	４．巻 44(2)
２．論文標題 コロナ禍が学生の学びと成長に与えた影響ー大規模調査から大学教育の今とこれからを考えるー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田剛史	４．巻 第14号
２．論文標題 大学教育における心理的安全性の重要性と学生エンゲージメントに及ぼす影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 関西大学高等教育研究	６．最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山田剛史	４．巻 2021年度No.1
２．論文標題 ニューノーマルの学習評価をどう考え，実践するか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学教育と情報	６．最初と最後の頁 16-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田剛史	4．巻 43(2)
2．論文標題 シンポジウム「コロナ時代の大学教育の挑戦ー大学教育と学生生活の両面からー」企画趣旨及び開催報告	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大学教育学会誌	6．最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田寛成・柴田昌平・瀧内義弘・市村道久・玉井克樹・竹村直樹・中村憲幸・藤嶋雄大・高畑祐輔・山田剛史	4．巻 第66集
2．論文標題 土台力養成に向けての新たな展開－成長し続ける組織の創造を念頭に置いて－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東山研究紀要	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田剛史・矢田尚也	4．巻 特別号
2．論文標題 コロナ禍における授業・学生生活に関するレポート	5．発行年 2022年
3．雑誌名 関西大学教学IRプロジェクト調査レポート	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田剛史	4．巻 619
2．論文標題 「つながり」を促す場としての新任教員研修ー京都大学の事例ー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 IDE 現代の高等教育	6．最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田剛史	4．巻 4
2．論文標題 高等学校における教育改革の動向ー生徒の学びはどう変わり，大学はどう受け止めるのかー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 薬学教育	6．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24489/jjphe.2020-036	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 澤田寛成・中村憲幸・羽田法寿・山田剛史	4．巻 65
2．論文標題 土台力修得に向けたカリキュラムマップの制作ー行事プログラムの可視化からのアプローチー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東山研究紀要	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山田剛史	4．巻 227
2．論文標題 学生の学びと成長を止めないニューノーマル時代の学生支援	5．発行年 2021年
3．雑誌名 リクルート カレッジマネジメント	6．最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 澤田寛成・柴田昌平・中村憲幸・山田剛史	4．巻 63
2．論文標題 トランジションの視点を加えたアクティブラーニングの実践と課題－共生（ともいき）の精神を備えた主体性の育成をめざして－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東山研究紀要	6．最初と最後の頁 25-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山田剛史・木原宏子・深谷麻未・茅根未央・渡邉あい子・岸岡奈津子	４．巻 2
２．論文標題 Student Successの実現に向けた学習支援に関する研究：学習支援専門職員へのフォーカスグループインタビューを通じた探索的検討	５．発行年 2024年
３．雑誌名 アカデミック・アドバイジング研究	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計54件（うち招待講演　27件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生の学びと成長を促す対面・遠隔のベストミックスを探る
３．学会等名 大学教育学会第44回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 心理的安全性が学生エンゲージメントと学習成果に及ぼす影響
３．学会等名 日本アカデミック・アドバイジング協会第2回年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史・芳中宗一郎・清水栄子
２．発表標題 Student Successと学生エンゲージメント
３．学会等名 日本アカデミック・アドバイジング協会第2回年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡田有司・山田剛史・半澤礼之・家島明彦
２．発表標題 学生の特徴と教養教育・専門教育における学びの関連
３．学会等名 大学教育学会第45回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史・半澤礼之・家島明彦・岡田有司
２．発表標題 心理的安全性と教養教育・専門教育における学びの関連
３．学会等名 大学教育学会第45回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生エンゲージメントを高める教育実践を考える
３．学会等名 岡山大学FD研修（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大阪・関西の経済発展を担う「人づくり」に向けた大学教育の諸課題
３．学会等名 関西経済同友会教育問題研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 振り返りとフィードバックによる学びと成長の一体的推進ー形成的評価の実践ー
３．学会等名 私立大学情報教育協会教育イノベーション大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 ニューノーマル時代における学生の学びと成長を考える
３．学会等名 大学行政管理学会・近畿地区研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大学生の主体的な学びを促す授業・環境のデザインー全国4千人の大学生調査結果をもとに考えるー
３．学会等名 ベネッセ教育総合研究所／ベネッセi-キャリア，進研アド　大学教職員向けウェビナー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生の主体的な学びのための環境づくり
３．学会等名 四條畷学園大学看護学部FD・SD研修会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 主体的な学びを駆動力に「深い学び」を実践する
３．学会等名 東山中学・高等学校主体的な学び実践研究フォーラム2022（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 コロナ禍に実施された大規模学生調査の結果
３．学会等名 大学コンソーシアム京都第28回FDフォーラム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 遠隔授業のインパクトとニューノーマルの高等教育
３．学会等名 中央教育審議会大学分科会質保証システム部会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 ウィズ・アフターコロナの初年次教育・学修支援ーSSPにおける2020-2021年度の支援ケース（現2回生対象）から考えるー
３．学会等名 立命館大学Student Success Program公開学習会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 Student Successのための関与をどう考え，実践するかーStudent Engagementに着眼するきっかけを交えてー
３．学会等名 立命館大学衣笠学生オフィス課研修
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 緊急対応型遠隔授業からニューノーマルの高等教育へー関西大学の取組を中心にー
３．学会等名 日本私立大学連盟 令和3年度教学担当理事者会議
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 オンライン教育において学生エンゲージメントをどう高めるか
３．学会等名 Blackboard Teaching & Learning Forum 2021
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生のウェルビーイングとモチベーションを高める教育・支援についてー学生エンゲージメントの観点から―
３．学会等名 Salon De 大学コンソーシアム大阪
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 探究的な学びは大学での学びにどのような影響をもたらすのか
３．学会等名 大学コンソーシアム京都 第19回高大連携教育フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 成長し続ける学校をいかに創造するか
３．学会等名 東山中学・高等学校主体的な学び実践研究フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 オンライン授業による試験方法と学修評価の仕方
３．学会等名 私立大学情報教育協会　FDのための情報技術研究講習会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 コロナ禍で学生の学びをどうデザインし、実践するか
３．学会等名 ポーアイ4大学合同FDセミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生の主体的な学びを促す授業をどのようにデザインし，実践するか
３．学会等名 福山市立大学FD講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 ウィズ・コロナにおける学生支援・学習支援の在り方
３．学会等名 新潟大学全学FD・SDプログラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 ニューノーマルの学生支援の在り方
３．学会等名 立命館大学SSP学習会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山田剛史・溝口侑
２．発表標題 高大接続を視野に入れた探究型初年次教育ー高校での探究学習を経験した学生はどのように学び成長するかー
３．学会等名 初年次教育学会第12回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学校から社会への移行はどのように多様化しているのかー大学教育と世代性の観点からー
３．学会等名 日本青年心理学会第27回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 「主体的・対話的で深い学び」を組織的に進めるために
３．学会等名 全国私立中学高等学校私立学校専門研修会・教育課程部会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 新たな時代を生きる子どもの学びと成長にどのように関わり育むか
３．学会等名 河合塾特別講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 高等学校における教育改革の動向ー生徒の学びはどう変わり，大学はどう受け止めるのかー
３．学会等名 日本薬学教育学会第4回大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学校から社会へのトランジションと学生エンゲージメント
３．学会等名 滋京奈地域人材育成協議会研究開発部門2019年度第1回PBL研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大学における学生エンゲージメントと自立を促す支援としかけ
３．学会等名 大学コンソーシアムあきた主催高等教育セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 新たな時代を生きる子どもの学びと成長にどのように関わり育むか
３．学会等名 大阪市立高等学校保護者対象講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 Student Successのための学生エンゲージメント
３．学会等名 立命館大学SSP公開学習会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生の学びと発達を促す大学教育とはー学生エンゲージメントの視点からー
３．学会等名 大学教育学会第40回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 高大接続改革とアクティブラーニングの推進
３．学会等名 日本薬学会第4回若手薬学教育者のためのアドバンストワークショップ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大学教育の質的転換と学生エンゲージメント－主体的な学びをいかに実現するかー
３．学会等名 大学英語教育学会九州・沖縄支部特別研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 トランジションをどう理解し，学校教育に位置づけるか
３．学会等名 第25回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 山田剛史・木原宏子・深谷麻未・茅根未央・渡邉あい子・岸岡奈津子
２．発表標題 Student Successをどのように捉え，どのように関与するかー学習支援専門職員へのフォーカスグループインタビューを通じた探索的検討ー
３．学会等名 日本アカデミック・アドバイジング協会第3回年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 指定討論　課題研究活動委員会企画シンポジウム「ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育」
３．学会等名 初年次教育学会第16回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 指定討論　研究委員会企画シンポジウム「高校時代の自己決定経験と発達的意義」
３．学会等名 日本青年心理学会第31回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 指定討論　公開シンポジウム「高大接続の課題を思考力・表現力・探究する力の観点から検討する」
３．学会等名 教育目標・評価学会第34回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 岡田有司・山田剛史・半澤礼之・家島明彦
２．発表標題 大学初年次における学びが教養・専門教育への意識に及ぼす影響
３．学会等名 日本教育工学会2024年春季全国大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山田剛史・溝口侑
２．発表標題 AL型授業における学習者の不安と授業環境認知および心理的安全性との関連
３．学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2024年

１．発表者名 岡田有司・山田剛史・半澤礼之・家島明彦
２．発表標題 高校・大学における学びの経験と教養・専門教育への意識との関連
３．学会等名 大学教育学会第46回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 初年次教育の経験と汎用的能力の差異ー大学の立地（地域性）による差異にも着目してー
３．学会等名 初年次教育学会第17回大会
４．発表年 2024年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生が主体的に学べる環境づくり PART2
３．学会等名 四條畷学園大学看護学部FD/SD研修（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 教職協働による修学支援の充実ー教員と職員が連携して教育効果を高めるためにー
３．学会等名 NPO法人学生文化創造 学生支援相談に関する基礎研修講座（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大学教育のトレンドと大学生心理の特徴，学習支援者による関与
３．学会等名 立命館大学SSP懇談会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 コロナ禍を経て，学生はどう変わったのか？
３．学会等名 立命館大学SSP公開学習会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 大学教育における心理的安全性の重要性と学生エンゲージメント
３．学会等名 高知大学全学FDフォーラム（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 学生エンゲージメントを高めるための教育・学習環境をどのように考え，実践するか
３．学会等名 びわ湖東北部地域連携協議会 2023年度FD研修会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 山田剛史
２．発表標題 主体的・対話的で深い学びの土台となる心理的安全性
３．学会等名 大学コンソーシアム京都 第29回FDフォーラム分科会（招待講演）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計1件

１．著者名 日本青年心理学会企画・若松養亮責任編集　大野久・小塩真司・佐藤有耕・平石賢二・三好昭子・山田剛史編集	４．発行年 2023年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 244
３．書名 心のなかはどうなっているの？ー高校生の「なぜ」に答える心理学ー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	溝上　慎一 (Mizokami Shinichi) (00283656)	桐蔭横浜大学・教育研究開発機構・教授 (32717)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関